

カナン発信のアマルナ書簡の 位置情報について

池田 潤[†]

キーワード：地理情報システム、言語地図、アマルナ文書、粘土板

1 はじめに

筆者は文部科学省の科学研究費補助金の助成を受けて¹、地理情報システム（Geographic Information System, 以下 GIS とする）を利用した北西セム語の言語地理学的研究（以下、北西セム語 GIS プロジェクトと略称する）に取り組んでいる。このプロジェクトは大きく分けて次の3つのステップからなる²。

- 北西セム語の等語線の再画定のため、筆者が前 2 千年紀、竹内茂夫氏（研究分担者）が前 1 千年紀の言語データの収集・分析・マークアップをおこなう。
- このデータベースを、筆者と乾秀行氏（研究分担者）が協力して構築する GIS システムの地図と連動させる。
- と によって作成された前 2 千年紀と前 1 千年紀の地図をオーバーレイさせることにより、筆者と竹内氏が北西セム語の等語線の通時的変遷を明らかにする。

[†]筑波大学大学院人文社会科学研究科

¹基盤研究 C (18520292)「前 2-1 千年紀における北西セム語の等語線の再画定：GIS による言語地理学的研究」(研究代表者：池田潤、平成 18-21 年度)。

²詳しくは、池田 (2006) 参照。

このうち第 2 ステップでは個々の言語データの位置情報が不可欠となるが、カナン発信のアマルナ書簡の位置情報をできる限り確定することが本稿の目的である。

2 問題の所在

本プロジェクトで扱う言語データは、すべて考古学的発掘³によって発見された碑文である。この種の碑文資料は発見された場所で書かれたと暗黙のうちに想定されることが多いが、必ずしもそうとは限らない。特に書簡は注意を要する。楔形文字文化圏において、書簡は黙読するものではなく、差出人は書記に書き取らせ、受取人も書記に手紙を読み上げさせたことが知られる⁴。前 2 千年紀のカナンでは、音声言語がカナン語で文字言語がアッカド語ないしその変種であったため、書き取りと読み上げの際には同時に翻訳も要した。これは手間のかかるプロセスであるため、簡単に会える相手に手紙を書くのはまれであった。したがって、ある遺跡から出土する書簡は基本的に簡単に会えない相手から送られたものと考えてよい。アマルナ書簡も例外ではない。エジプトで出土してはいるが、エジプトで書かれたものは 350 通⁵、11 通にすぎない⁶。他は、すべて国外からファラオに宛てて送られた書簡である。差出人は列強諸国（アッシリア、バビロニア、ヒッタイト、ミタンニ、アラシア、アルザワ）およびエジプトの属国（東地中海沿岸の都市国家）である。本プロジェクトの対象は後者となる。基本的に、差出人の名前と肩書き、あるいはそのどちらかが書かれているため、どの書簡がどこで書かれたかを同定するのは一見容易に思えるが、実際には次のような問題が立ちはだかっている。

³盗掘等の非公式な「発掘」を含む。

⁴書簡が「(受取人)に言え」という定型句で始まることから分かる。この命令文は書簡を読み上げる書記に対する命令文であり、受取人が書簡を黙読していたとすると意味をなさない。

⁵382 点のアマルナ文書のうち、書簡ないし目録は 350 点で、残りは文学作品の写し、字音表、辞書等である。詳しくは、池田 (1992:15, 注 2) 参照。

⁶バビロニア宛てが 3 通（目録を含む）、アルザワ宛てが 1 通、属国宛てが 7 通ある (Moran 1992: xvii 参照)。送付済みの手紙の控えや下書き、あるいは未送付の手紙と考えられる。

差出人の名前および肩書きが判読できないため、差出人不明の書簡がある。

差出人の名前は書かれているが、肩書きが一度も書かれていないか、破損しているため、その人物がどの町の住民なのか特定できない場合がある⁷。

発信地の古代名が分かっているが、その町がどこにあったのかが分からない場合がある。

問題点 は、粘土板の状態によって、名前および肩書きの書かれた部分が完全に欠損している場合と劣化ないし摩耗のため判読が困難な場合とに分かれる。前者の場合、点在する複数の断片をつなぎ合わせることによって欠損部が復元される場合がある。後者の場合、粘土板の実物を肉眼で照合（コレーション）したり、クリーニングしたり、写真に撮って画像処理したりすることにより、判読可能となる場合もある。また、問題点 とともに、書簡の内容や字体を精査することによって、ある程度まで発信地が比定できる場合がある⁸。問題点 については、地名の歴史地理学的な考証がなされてきた⁹。遺跡の発掘により、考証が立証される場合もある¹⁰。さらに、最近になって、粘土板の成分分析を手がかりとしてアマルナ書簡の発信地を検証する研究 (Goren et al. 2004) も現れた。

そこで、本稿ではまず従来型の文献学的研究の成果を Izre'el (1990) によって確認したうえで、Goren et al. (2004) をもとにこれを可能な限り修正し、それによって得られた発信地の位置を Belmonte Marín (2001) にしたがって確定する。これにより、カナン発信のアマルナ書簡の位置情報に関して、現時点で最も信頼できるデータが得られることになる。

⁷一例として、Biryawaza (EA 194-197 の差出人) をあげることができる (注 37 参照)。

⁸例えば、Juan-Pablo Vita はベルリン博物館所蔵のアマルナ文書を撮影した画像をネット上に公開し (<http://amarna.iciop.csic.es/>)、これらの画像を活用した研究 (Vita 2000 など) をおこなっている。

⁹Belmonte Marín (2001) はその集大成である。

¹⁰一例として、Kumidi (現代名: Kamid el-Loz) をあげることができる。詳しくは、OEANE, p. 265 参照。

3 Izre'el (1990) による文献学的先行研究の整理

Izre'el (1990) は、アマルナ書簡の発信地に関してそれまでに提出された知見を要約するかたちで発信地一覧を呈示している¹¹。属国からの書簡のうち発信都市が特定されたものを列挙すると、以下のとおりである。

表 1 : Izre'el (1990) によるアマルナ書簡の発信地 (抄録)

古代名	テキスト番号 (括弧内は差出人)
Acre (Akka)	EA 233-4, 235+327 (Satana); EA 232 (Surata)
Akšap	EA 223 (Endaruta)
Amurru	EA 60-62, 371 (Abdiaširta); 156-161, 164-168, 171 (Aziru); 170 (Ba'luya & Beti'ilu), 169 (Beti'ilu? Iriteššub?)
Ashqelon (Ašqaluna)	EA 320-326 (Yidya)
Aštartu	EA 364 (Ayyab)
Beyrouth (Beruta)	EA 141-143 (Ammunira); 97? (Yapa'hadda?); 98? (Yapa'hadda)
Bit-Tinni	EA 260 (Ba'lumir)
Byblos (Gubla/i)	EA 139-140 (Iirapi' & Byblos); 68-95; 101-138 ¹² ; 362 (Ribhaddi)
Enišasi	EA 363 (Abdireša); 187 (Šatiya)
Gath?	EA 63-65, 335 (Abdiaštarti); 278-284, 366 (Šuwardata)
Gath Karmel?	EA 264-266 (Tagi)
Gath-Padalla? (Gittipadalla)	EA 249-250 (Ba'lu-UR.SAG)
Gezer (Gazri)	EA 292-293 (Ba'lušipti); 267-271 (Milkilu);

¹¹592-595 ページがテキスト番号順に配列した一覧表、595-597 ページが同じ情報を発信地別に並べ替えた一覧表となっている。

¹²EA 136-138 はピブロスを追われ、バイルートに逃れた Ribhadi がバイルートから送った書簡である。したがって、EA 136-138 の発信地はバイルートであるが、ここでは Ribhadi 書簡としてまとめている。

	297-300, 378 (Yapa'ū)
Gintiašna	EA 319 (Z/Šurašar)
Guddašuna	EA 177 (Yamiyuta)
Ḥašabu	EA 174 (Beri)
Ḥasi (Ḥazi)	EA 175 (Ildaya); 185-186 (Mayarzana)
Hazor (Hašura/i)	EA 228 (Abditirši); 227 (King of Hazor)
Irqata	EA 100 (Irqata and the elders)
Jerusalem (Urusalim)	EA 285-291 (İR-ḥeba)
Kumidi	EA 198 (Arašša); 194-197 (P/Biryawaza)
Labana (= Lapana)	EA 193 (Tiwate)
Lachish (Lakiša)	EA 330-332 (Šiptiba'la); 328 (Yabni'ilu); 329 (Zimreddi)
Megiddo (Magidda)	EA 242-247, 365 (Biridiya); 248 (Yašdata) ¹³
Mušihuna	EA 180(?+)183, 182, 184 (Šutarna)
Na..ha..(?)	EA 272 (Šum...)
Nazib'a	EA 206 (Ruler of Nazib'a)
Nuḥašše	EA 51 (Addunirari)
Pihilu	EA 255-256 (Addunirari)
Qanu	EA 204 (Ruler of Qanu)
Qatna	EA 52-55, 56? (Akizzi)
Qedesh (Qidši)	EA 189 (Etakkama)
Ruḥizza	EA 191-192 (Arsawiya)
Šabuma	EA 273-274 (NIN.UR.MAḤ.MEŠ)
Sidon (Šiduna)	EA 144-145 (Zimreddi)
Shamon (Šamhuna)	EA 225 (Šamuhadda)
Sharon (Šaruna)	EA 241 (Rušmanya)
Šašhimi	EA 203 (Abdimilki)
Shechem	EA 252-254 (Lab'ayu)

¹³Yašdata は別の町（おそらくタアnak）からメギドに亡命し、メギドからこの書簡を送っている。

Tunip	EA 59 (Citizens of Tunip)
Tyre (Şurri)	EA 146-155 (Abimilki); 295 (...šipti/dani)
Ṭubu	EA 205 (Ruler of Ṭubu)
Ugarit	EA 45-47 (Ammištamru); 49 (Niqmaddu); 48 (Puduḫeba, Queen of Ugarit)
Yurša	EA 314-316 (PU-ba'la)
Z/Širibašani	EA 201 (Artamanya)
Zoar? (Zuḫra)	EA 334 (unknown)
Zu'nu	EA 220 (Nukurtuya/Kurtuya?)
..i]Gmate?	EA 257-259 (Ba'lumihir)

4 Goren et al. (2004) による粘土板の成分分析

本書は、陶器分析、顕微考古学、空間考古学を専門とする Y. Goren、考古学と歴史地理学を専門とする I. Finkelstein、文献学、歴史学、歴史地理学を専門とする N. Na'aman の 3 名(いずれもテル・アビブ大学)を中心とする研究チームによる共同研究の成果である。この研究プロジェクトは、アマルナ書簡の粘土板を記載岩石学的、化学的に分析し、その結果を発信地と推定される遺跡周辺の地質(火成岩、変成岩、海浜砂、温泉沈殿物、凝灰岩等の有無)と照合することにより、発信地をめぐる議論を検証するというもので、1997 年に始まり、ベルリン博物館、大英博物館、アシュモレアン博物館(オクスフォード)、ルーブル美術館に所蔵される約 300 枚の粘土板の調査がおこなわれた。

記載岩石学的分析では偏光顕微鏡等を用いて岩石の組成と組織を調べるが、Goren らはこれに加え微細形態学 (micromorphology)¹⁴ 的な観察もおこなっている。なお、通常の記載岩石学的調査は対象物の破壊をとまなうが、粘土板の破壊は最小限に抑えなければならない。そこで、粘土板に破損があれば、破損面から約 5mm 四方の薄片をメスで切り取るか (peeling)、歯

¹⁴微古生物学 (micropaleontology)、微古植物学 (microarchaeobotany)、微古動物学 (microarchaeozoology) に下位区分される。

科用の回転ダイヤモンドカッターで破損面に 3mm 幅の切り込みを入れ、メスでブロック状に切り取って (blocking) 標本を採取している。破損面がない場合は、Goren が開発した Scattered Petrographic Analysis (Goren et al. 2004: 11-12 参照) という手法を援用している。記載岩石学的分析の結果は次のフォーマットで粘土板ごとに詳しく述べられている。

- ・ サンプルング方法 (Sampling method)
- ・ サンプルングの信頼性 (Reliability)
- ・ 標本の基質 (Matrix)
- ・ 標本への混入物 (Inclusions)
- ・ 標本に混入した動植物 (Palaentology¹⁵, Vegetal material¹⁶)
- ・ 標本の焼成温度 (Firing temperature)
- ・ 地質学的解釈 (Geological interpretation)
- ・ 参照すべき他の粘土板 (Reference)
- ・ 結論 (Conclusions)

それに加え、生データとして、174-214 ページに偏光顕微鏡で撮影した粘土標本のカラー写真が掲載されている。

化学的分析では岩石の成因を調べる。1970 年代にローレンス・バークレー国立研究所 (Lawrence Berkeley National Laboratory) でアマルナ文書の中性子放射化分析 (neutron activation analysis, 以下 NAA とする) がおこなわれた¹⁷。Goren らは NAA の分析結果にも目配りしつつ、必要に応じて誘導結合プラズマ発光分光分析 (Inductively Coupled Plasma Atomic Emission

¹⁵ イスラエル地質学研究所 (Geological Survey of Israel) の L. Grossowicz が担当。

¹⁶ ハイファ大学生物学部の Simcha Lev-Yadun と Moshe Inbar が担当。

¹⁷ 試料に放射線を照射した結果、不安定になった原子核から放出される放射線を測定することによって元素の分析と定量を行うのが放射化分析で、NAA はその一種。試料に含まれる元素を化学的に分離しないまま多くの元素を同時に定量できるのが放射化分析の特徴である。1970 年代にアマルナ文書の粘土板が NAA によって分析され、その分析結果を各地の遺跡から出土した陶器の成分と比較することにより、粘土板の発信地を特定する試みがおこなわれた。詳しくは、Goren et al. (2004: 13-14) に収録された M. Artzy の解説とそこで参照された文献を見よ。

Spectrometry) と誘導結合プラズマ質量分析 (Inductively Coupled Plasma Mass Spectrometry) という化学的分析を実施している¹⁸。化学的分析が適用された粘土板がある場合、コーパス単位で分析結果が述べられている。また、326-332 ページに分析結果の全数値が収録されている。

地質学的解釈においては、(1)ある粘土板の記載岩石学的分析の結果が書簡に明記された発信地の地質に適合するかどうかを検証している。適合すれば発信地が確認されることになる。適合しない場合は、(2)史料から各都市国家の勢力範囲を画定した上で、その範囲内に粘土板の分析結果に適合する地質が存在するかどうかを検証している。都市国家そのものではなく、その近郊や勢力範囲内の別の町から粘土が調達されたケースも存在するからである。都市国家の領域内に粘土板の分析結果と完全に一致する地質が存在しない場合、(3)領域外で地質の一致する最も近い場所を発信地の候補として提案する。発信地の記載がない粘土板については、(4)従来、発信地と言われてきた場所の地質との比較検討をおこなっている¹⁹。Goren らの検討結果は次の通りである。

表 2 : Goren et al. (2004) によるアマルナ書簡の発信地一覧²⁰

EA 45	Ugarit
EA 46-7	Ugarit ²¹
EA 48	Ugarit

¹⁸誘導結合プラズマ (ICP) とは気体に高電圧をかけることによって発生した放電プラズマのことで、これを利用して発光分光分析をおこなうのが ICP-AES で、質量分析をおこなうのが ICP-MS である。Goren et al. (2004: 13) は主要元素 (Mg, Al, Si, Ca, Ti, Mn, Fe, P, S) および微量元素 (V, Pr, Co, Ni, Cu, Zn, Sr, Y, Ba, Be, La) を析出するのに前者を、希土類 (Ce, Pr, Nd, Sm, Eu, Tb, Dy, Ho, Tm, Yb, Lu) の同定に後者を用いている。

¹⁹詳しくは、Goren et al. (2004: 21) 参照。

²⁰列強諸国発信の書簡は本研究の目的からはずれるため、表から除外した。都市名および遺跡名の表記は原則として Goren et al. (2004) に従うため、表によって表記が微妙に異なる場合がある。

²¹これらの書簡は差出人が破損しており、Izre'el の表では疑問符付きであったが、Goren らの分析 (2004: 88-91) により、EA 45-48 の成分が似通っており、また他のアマルナ書簡とは異なることが確認された。さらに、その成分は Ugarit 付近の地質と符合するため、これらの書簡は Ugarit 発信とみなすことができる。

EA 49	未分析
EA 50	Byblos (Jbail) - NGC ²²
EA 51	Nuḥašše ²³
EA 52	未分析
EA 53-55	Qatna (Tell el-Mishrife)
EA 56	未分析
EA 57	Qatna (Tell el-Mishrife) ²⁴
EA 58	Ullasa? ²⁵
EA 59	Tunip (Tell 'Asharneh)
EA 60	Mountains east of Tripoli
EA 61-62	Ardata (Tell Arde)
EA 63	Gath (Tel Şafit)
EA 64	不明 ²⁶
EA 65	Gath (Tel Şafit)
EA 66	Gaza ²⁷
EA 67	Nii (Qal'at al-Mudīq) ²⁸

²²Neogene coastal clay (新第三紀沿岸粘土)。

²³この粘土板の成分は Nuḥašše 地域 (アレppoとハマの間) の地質に合致する。しかし、記載岩石学的に目立った特徴がないため、Addunirari 王の都がどこにあったのかを特定することはできない (Goren et al. 2004: 92)。

²⁴EA 53-55 が Qatna 発信であることが粘土板の成分によって確認され (Goren et al. 2004: 94-96)、非常に断片的で差出人名も残っていない EA 57 の成分が EA 53-55 に近いことも分かった。EA 57 の 2 行目にカトナ王 Akizzi への言及があるため、EA 57 もカトナないしその付近から送られた可能性が高い。

²⁵EA 58 の成分が EA 61 (Ardata 発信) に酷似していることから、EA 58 も Ardata 付近から発信された可能性が高い (Goren et al. 2004: 122-123)。書簡の内容から考えて Ardata から送られたとは考えられないため、Goren ら (ibid.) は Ullasa を有力な候補として提案する。Ullasa の位置については 2 つの可能性がある。ひとつは Tall al-Hāna (34N30, 35E55) で、もうひとつは Tall Kastina (34N20, 35E30) である (Belmonte Marín 2001: 320-321)。

²⁶EA 278 (Shuwardatu) および EA 64 (甥の Abdi-Ashtarti) の粘土は Tel Şafit 周辺のものではない。

²⁷文字と文章はカナン北部のものであるが、粘土板の成分はガザ地域の特徴を示す。差出人が北部から書記を連れてガザを訪れ、そこからこれらの書簡を送ったと考えれば、この問題は説明が付く。

EA 68-69	Byblos (Jbail) - NGM ²⁹
EA 70	未分析
EA 71-72	Byblos (Jbail) - NGM
EA 73	未分析
EA 74	Byblos (Jbail) - NGM
EA 75-76	未分析
EA 77	Byblos (Jbail) - NGM
EA 78	Şumur (Tell al-Kazel) ³⁰
EA 79	Byblos (Jbail) - NGM
EA 80	不明
EA 81-89	Byblos (Jbail) - NGM
EA 90-93	Byblos (Jbail) - NGC
EA 94	未分析
EA 95	Byblos (Jbail) - NGC
EA 96	Şumur (Tell al-Kazel) ³¹
EA 97	Gaza ³²

²⁸EA 67 は差出人が破損しており、Izre'el の表では “Phoenician coast” 発信とされていた。Goren ら (2004: 92-93) は粘土板の成分を分析するとともに、書簡の内容を歴史的に精査した結果、この書簡が Nii (現代の Qal'at al-Mudīq) 発信であるとの結論に達している。

²⁹Neogene coastal marl (新第三紀沿岸泥灰土)。

³⁰Ribhaddi がファラオに宛てた EA 78, 103, 126 は Şumur で書かれたと考えられる。EA 103 では差出人の Ribhaddi 自身が「私はツムルにいる」(l. 13-14) と明言しており、粘土板の成分も Aziru が Şumur から送った手紙 (EA 165-167) に類似しているからである。Şumur にはエジプトの行政センターがあり、ピロソス王 Ribhaddi が Şumur に避難していたときにこの書簡を書いたことになる。EA 78, 126 には Ribhaddi が Şumur にいたとはっきりと書かれていないが、粘土板の成分が EA 103 および EA 165-167 に類似しているため、これらもまた Şumur で書かれたと考えられる。さらに、EA 96 はエジプト軍の司令官が Ribhaddi に宛てた手紙であるが、この司令官が Şumur にいたことを示唆する内容である。この粘土板の成分も EA 103 および EA 165-167 に類似しているため、やはり Şumur で書かれたと考えられる。

³¹粘土板の成分が EA 165-167 に近い。

³²EA 98, 141-143 について、粘土板の成分分析 (Goren et al. 2004: 161-164) からベイルート発信の書簡であることが確認された。これに加え、EA 136-138 もベイルートから送られた書簡である (詳しくは、注 44 参照)。これらの粘土板は、素材に関して「均質なグループ」(Goren et al. 2004: 164) を成している。EA 97 の差出人 (^mia-ap-[a]-[a]-[i]ŠKUR) はおそらく EA 98

EA 98	Beirut
EA 99	未分析
EA 100	Irqata (Tell 'Arqa)
EA 101-102	Byblos (Jbail) - NGM
EA 103	Şumur (Tell al-Kazel) ³¹
EA 104	未分析
EA 105	Byblos (Jbail) - NGC
EA 106	Byblos (Jbail) - NGM
EA 107	未分析
EA 108-112	Byblos (Jbail) - NGC
EA 113-114	未分析
EA 115	Byblos (Jbail) - NGC
EA 116	未分析
EA 117-121	Byblos (Jbail) - NGC
EA 122	未分析
EA 123	Byblos (Jbail) - NGC
EA 124	未分析
EA 125	Byblos (Jbail) - NGC
EA 126	Şumur (Tell al-Kazel) ³¹
EA 127	Byblos (Jbail) - NGC
EA 128	未分析
EA 129-133	Byblos (Jbail) - NGC
EA 134-135	未分析

(^mia-pa-[a]h-^lŠKUR) と同じであるが、粘土板の成分を分析したところ、上記の「均質なグループ」とは異なり、ガザ地方の堆積物を含むことが分かった (Goren et al. 2004: 161-162)。そのため、EA 97 はガザのエジプト宮廷で書かれたと考えるのが至当である。なお、Gaza は楔形文字では URU.ḡa-za-ti(KI) (EA 289:17, 33, 40; TANK 6:12) ~ URU(KI) az-za-ti (EA 296:32; 129:84) と書かれ、現代の Tall Ḥaruba (Belmonte Marín 2001: 127) と同定されている。

EA 136	Beirut ³³
EA 137	未分析
EA 138	Beirut ⁴⁴
EA 139-140	Byblos (Jbail) - NGC
EA 141-143	Beirut
EA 144-145	Sidon
EA 146	不明 ³⁴
EA 147	Tyre
EA 148	未分析
EA 149	Tyre
EA 150	未分析
EA 151-152	Tyre
EA 153	未分析
EA 154-155	Tyre
EA 156	Ardata (Tell Arde)
EA 157	Mountains east of Tripoli
EA 158	未分析
EA 159	Ardata (Tell Arde)
EA 160	未分析
EA 161	Iraqata (Tell 'Arqa)
EA 164	Iraqata (Tell 'Arqa)
EA 165-167	Şumur (Tell al-Kazel)

³³EA 136-138 は内容的にビブロスを追われ、ベイルートに逃れた Ribhaddi がベイルートから送った書簡である。EA 136, 138 の粘土板の成分もベイルート発信の書簡 (EA 98, 141-143) と同質である。

³⁴ツロ (Tyre) 発信とされる書簡のうち、EA 146 以外はすべて地元の土を使っていることが分かった (Goren et al. 2004: 166-169, ただし EA 148, 150, 153 は未分析)。EA 146 の粘土板は下部白亜系頁岩を含むが (ibid.)、ツロ付近にもエジプトの行政センター (ガザ、ベトシャン、ツムル) 付近にも見られない地質である。そのため、EA 146 の粘土板に下部白亜系頁岩が含まれる理由は不明である。

EA 168	Gaza
EA 169-171	Irqata (Tell 'Arqa)
EA 173-175	Kumidi ³⁵
EA 176	未分析
EA 177-179	Kumidi ³⁵
EA 180	未分析
EA 181-187	Kumidi ³⁵
EA 188	未分析
EA 189	Qidshu (Tell Nebi Mend)

³⁵Enišasi, Hasi, Guddašuna, Hašabu はいずれもベカー渓谷にあったものと考えられてきたが、厳密な所在地については決着がついていない（これまでの説については、3.2 節参照）。粘土板の成分分析によっても、この状況は大きく変わっていない。すなわち、Goren ら (2004: 126-133) が検証した EA 363, 187 (Enišasi)、EA 175, 185, 186 (Hasi)、EA 177 (Guddašuna)、EA 174 (Hašabu)、および EA 173, 181, 178, 179 (発信地不明) の成分はどれもベカー渓谷の地質に一致する。しかし、ベカー渓谷のどこから発信されたかをピンポイントで指し示す特徴的な成分は見つかっていない。

しかし、重要な発見もあった。まず、これらの粘土板の成分は「驚くほど均質」(ibid., 133) だという。ベカー渓谷は全長 150km におよび、地質も変化に富んでいる。粘土板の発信地がこのような地域に点在する場合、粘土の成分も変化に富むのが通常である。上記の粘土板の成分が驚くほど均質なのは、すべて（ないし大半）の粘土板が同じ場所で書かれたからだと考えるのが最も無理のない説明であろう (ibid.)。

もうひとつ興味深い事実がある。EA 174 (Hašabu)、EA 175 (Hasi)、EA 363 (Enišasi) の 3 通は粘土板の成分が似ているだけでなく、書簡の半分以上が一字一句同一の文言となっている。そのため、Moran (1992) はこれら 3 通を “A joint report on Amqu (1)-(3)” と呼んでいる。しかし、いかに申し合わせたとしても一字一句同一の文言を書くのは容易ではなく、3 通の書簡が同じ場所で一度に書かれたか、同じ書記が 3 通の書簡作成を請け負ったと考えるのが自然である。

この状況を Goren ら (ibid., 132-133) は次のように説明する。ベカー渓谷には 50km² 規模の弱小国家ないし都市国家が無数に点在し、その多くは自分たちで書記を雇う財力がなかったため、書記のいる大都市から書簡を送っていたものと考えられる。そのような大都市としてまず思い浮かぶのが Kumidi (現代名: Kamid el-Loz) である。Kumidi にはエジプトの行政センターが置かれていたため、書記が常駐していたのは間違いない。その書記がベカー渓谷の都市国家の文書作成を請け負っていた蓋然性は高いと言える。付近の地質を見ても、Kumidi は上記の粘土板の発信地として申し分ない。

上記の粘土板と実際に Kumidi で書かれた粘土板の成分を比べれば、この問題に最終的な決着が付くと期待される。しかし、残念なことに、Kumidi から発信された EA 198 (カイロのエジプト博物館所蔵) も Kamid el-Loz 出土の粘土板も Goren らの分析の対象となっていない。

EA 191	未分析
EA 192-193	East of Orontes ³⁶
EA 194	Damascus ³⁷
EA 195	未分析
EA 196-197	Damascus ³⁷
EA 198-199	未分析
EA 200-205	Southern Bashan or Yamruk valley
EA 206	未分析
EA 207	Ashtartu (Tell 'Ashtara)
EA 208-210	Damascus ³⁸
EA 211-213	Gaza ²⁷
EA 214	不明
EA 215	Gaza ²⁷
EA 216	未分析
EA 217-218	Gaza ²⁷
EA 219	不明
EA 220	未分析
EA 221-222	Tel Yokneam? ³⁹
EA 223	Tell Keisan ⁴⁰

³⁶Goren et al. (2004: 99) によると、粘土板の成分として玄武岩（鮮新世から洪新世）が目立つため、Labana（および Ruhizzi）は玄武岩流の付近にあったと推定される。ペカー高原北部、とくにオロンテス川東岸（クセイル周辺かその南部ないし南東部か）が暫定的な候補となる。これにより、Labana を Lebwe（レボ・ハマテ）と同定する説は否定される。

³⁷EA 194-197 は Biryawaza が送った手紙である。Biryawaza がどこの支配者であったのかははっきり書かれていないが、ダマスカスが有力な候補である（Goren et al. 2004: 170）。粘土板の成分分析もこの説を支持する結果となった（Goren et al. 2004: 170-171）。

³⁸EA 208-210 の粘土板の成分は EA 194, 196 に近い。書簡中に発信地への言及はないが、ダマスカスで書かれたと考えることができる。

³⁹EA 221-222 の粘土板の成分は EA 257-259 と同一である。

⁴⁰Akšap を Tall Harbağ (32N40, 35E01) とする説もある（Belmonte Marin 2001: 8）。テルの規模と層位から見ると Tell Keisan 説の方が有力であるが、粘土板の成分分析もこれを支持する結果となった（Goren et al. 2004: 231-233）。

EA 224	Beth-shean (Tell el-Ḥuṣṣn) ⁴¹
EA 225	未分析
EA 226	Gaza ²⁷
EA 227-228	Hazor
EA 229	不明 ³⁴
EA 230	不明
EA 231	Byblos ⁴²
EA 232	Beth-shean (Tell el-Ḥuṣṣn) ⁴¹
EA 233	未分析
EA 234-235	Beth-shean (Tell el-Ḥuṣṣn) ⁴¹
EA 236	不明
EA 237-239	Anaharath (Tel Rekhesh) ⁴³
EA 240	不明
EA 241	Southern Bashan or Yamruk valley
EA 242-243	Megiddo (Tell el-Mutesellim)
EA 244	未分析
EA 245-246	Megiddo (Tell el-Mutesellim)
EA 247	未分析
EA 248	Megiddo (Tell el-Mutesellim) ⁴⁴

⁴¹粘土板の成分から見て、この書簡には地元の粘土が使われておらず、ベト・シャン渓谷で書かれたと考えられる。ベト・シャン渓谷にはベト・シヤンのほか、テル・レホブ、ペラなどの遺跡があるが、遠く離れた町の支配者がわざわざ他の町から書簡を送ったとすると、エジプトの行政センターのあったベト・シャン以外には考えられない。

⁴²EA 231 の粘土板の成分は EA 72 と同じである (Goren et al. 2004: 315)。書簡中に発信地への言及はないが、ピプロスで書かれたものと思われる。

⁴³これらの書簡に発信地への言及はない。差出人は EA 237, 238 が Bayadi, EA 239 が Baduzana である。粘土板の成分が非常に近いため、これら 3 通は同じ場所で書かれたと考えられる。成分に合致する地域はガリラヤ地方東部かゴラン高原の南側の斜面であるが、書簡の内容から見て、前者の可能性が高い。ガリラヤ地方東部にはいくつかの遺跡があるが、規模と場所を考えると Tel Rekhesh が最も有力な候補となる (Goren et al. 2004: 240-243)。

EA 249	Rehob? ⁴⁵
EA 250	未分析
EA 251	不明
EA 252-254	Shechem ⁴⁶
EA 255	Beth-shean (Tell el-Huṣṣn) ⁴⁷
EA 256	Pella
EA 257-259	Tel Yokneam? ⁴⁸
EA 260	未分析
EA 261	不明
EA 262	未分析
EA 263	Rehob? ⁴⁹
EA 264-266	Jatt? ⁵⁰

⁴⁴EA 248 の差出人は Yashdata である。彼はこの書簡の中で「今、私は(メギド王)ピリデイヤとともにいる」(ll. 18-20) と述べているが、実際にこの書簡がメギドから送られたことが粘土板の成分分析によって立証されたことになる。

⁴⁵EA 249 の差出人は一部破損しているが、EA 250 と同じく Ba'lu-UR.SAG であると考えられる。粘土板の成分と手紙の内容から、Goren ら (2004: 248-250) はこの書簡が Tel Rehov (Tell eṣ-Ṣarem) で書かれたのではないかと提案する。しかし、これは Ba'lu-UR.SAG と Ba'lu-meḥir (EA 257-259) が同一人物ではなく、EA 250:12 に出てくる URU gi-ti-pa-da-al-la が Ba'lu-UR.SAG の都ではないという 2 つの前提に基づく提案であり、議論の余地が残る。

⁴⁶EA 253 は他の 2 枚と成分が異なる。シェケムでは複数のタイプの粘土が使われていたものと考えられる。

⁴⁷EA 255 と EA 256 の差出人は同一であるが、粘土板の成分が異なる。EA 255 は EA 224 に近いいため、EA 256 はペラで、EA 255 はベト・シャンで書かれたと考えるのが妥当と思われる。

⁴⁸EA 257-259 (差出人はすべて Ba'lu-meḥir) の粘土板の成分(凝灰岩、ソレイト、完晶質の玄武岩、石灰質の堆積岩)をすべて満たす地域は限られており、Tel Yokneam が最も有力な候補となる。しかし、Tel Yokneam と EA 257:21 に出てくる *..i]k-ma-te* を同定するのは言語学的に無理がある (Goren et al. 2004: 254)。*..i]k-ma-te* は Knudtzon (1915: 818) の読みで、彼はこの語を訳出していない。これを Na'aman が学位論文の中で [URU x-x-i]G-ma-te という地名として読むことを提案した (Moran 1992: 310 参照)。Belmonte Marín (2001: 190) は M. Liverani に従い、これを [^mMi-]ik-ma-te と復元して、旧約聖書ヨシュア記 16:6 および 17:7 に出てくるミクメタトと同定する。別の復元案として、Rainey (1989-1990: 70) の [URU Kin-*i]i ma-gal* “[the city of Gat]h, very diligently” がある。

⁴⁹EA 263 は差出人名が破損しているため、発信地不明の書簡である。粘土板の成分が EA 249 に近いいため、EA 249 と同じ場所で書かれたと考えられる。

EA 267	未分析
EA 268-273	Gezer
EA 274	未分析
EA 275-276	不明 ⁵¹
EA 277	不明
EA 278	不明 ⁵¹
EA 279	Gath (Tel Şafit)
EA 280	未分析
EA 281-284	Gath (Tel Şafit)
EA 285	Beth-shean (Tell el-Huşn)41
EA 286-290	Jerusalem
EA 285-291	Gezer ⁵²
EA 292	Gezer
EA 293	未分析
EA 294	Ashdod (Tel Ashdod) ⁵³

⁵⁰EA 264-266 の差出人は Tagi である。Tagi は自分が治める都市の名を書き記していないが、エルサレムの領主アブディ・ヘバが「Ginti-kirmil は Tagi のもので、Ginti の人々はベト・シヤンの守備隊だ」(EA 289:18-20) と記していることから、Tagi は Ginti-kirmil の支配者であったことが分かる。Goren ら (2004: 256-258) は粘土板の成分を根拠に Jatt が Ginti-kirmil であったのではないかと主張する。しかし、これは Jatt を Gitti-padalla と同定する説 (Albright 1946) と対立する。また、EA 266 の粘土の感じや書きぶりが EA 296 に似ているという指摘 (Knudtzon 1915: 1340; Vita 2000: 74) とも矛盾する。さらに、最近 Tagi がシケムの領主 Lab'ayu に宛てたシリンドーがベト・シヤンから発見されたが、その成分分析をおこなったところ、EA 264-266 と一致せず、なぜかシケムやエルサレムの粘土板に近かったという問題もあり (Goren et al. 2004 259)、議論の余地が残る。

⁵¹これらの書簡が同一の文言を含み、文字と粘土も同一であることから、Knudtzon (1915:1329 nn. 1-2) は EA 275-257 を EA 278 の直前に配置している。Vita (2000) は EA 275-8 がゲゼルの書記によって書かれたと考える。しかし、粘土板の成分はゲゼルのものとは異なるため、Na'aman と Goren はこれらの書簡の発信地の有力な候補として Beth-Shemesh をあげる。ただし、Finkelstein は考古学的見地からこの Beth-Shemesh 説に対して慎重な立場をとる。

⁵²文字と言語はエルサレムの特徴を示すが、粘土板の成分はゲゼルと一致する。

⁵³Knudtzon (1915:1346, n. 1) によると、これらの書簡は文字が EA 292-4、粘土が EA 294 と同一である。しかし、Goren ら (2004: 292-594) の分析により、粘土板の成分はゲゼルのものとは異なり、アシュドドとカエサリアの間の沿岸地帯に属することが分かった。アマルナ時代

EA 295	Tyre
EA 296	Ashdod (Tel Ashdod) ⁵³
EA 297	Gezer
EA 298-300	Gaza
EA 301	未分析
EA 302-306	Ashkelon (Tell Ashkelon) ⁵⁴
EA 305	未分析
EA 306	Ashkelon (Tell Ashkelon)
EA 307-310	Gaza ⁵⁵
EA 311	Lachish (Tell ed-Dweir)
EA 312	Gaza ⁵⁴
EA 313-314	未分析
EA 315-316	Tell Jemmeh ⁵⁶
EA 317-318	Gaza ⁵⁴
EA 319	Gaza ⁵⁷
EA 320	未分析
EA 321	Gaza ⁵⁸

にこの地域で都市国家をなしていた遺跡はアシュドドしかないため、発信地はアシュドドと推定される。

⁵⁴EA 302-306 の差し出し人は Shubandu である。Shubandu の肩書きは書かれていないが、アシュケロンの支配者とする説がある (Goren et al. 2004: 297)。粘土板の成分分析はこの説を支持する結果となった。

⁵⁵粘土板の成分は EA 168 と同じである。

⁵⁶他に Tel Haror や Tel Sera' に比定する説もあるが (Goren et al. 2004: 299)、Goren らは粘土板の成分分析によって Tell Jemmeh が Yurša であったという結論に達した。

⁵⁷Knudtson はこの地名を *a[ħ]-ti-rum-na* と読んだ。後に *gi[n]-ti-aš-na* という読み替えが提案され、エジプト語資料の *kntw-ʿsn* と同定された (Goren et al. 2004: 302)。しかし、粘土板の成分は EA 168 と同じであり、この粘土板がガザで書かれたことを示唆する。これにより Ginti-ašna 説は崩れることになる。Goren ら (2004: 302-303) はこの地名を *Ah-ṭi-rū-na* と読み替えようと、この町が書記を自前で雇えない小都市国家で、ガザにあったエジプトの行政センターからこの書簡を送ったと解釈する。

⁵⁸ガザとアシュケロンの粘土板の成分が似ているため、EA 321 はどちらで書かれていてもおかしくない。Goren ら (2004: 295) は書簡の内容からガザで書かれたと判断している。

EA 322	未分析
EA 323-326	Ashkelon (Tell Ashkelon)
EA 327-328	未分析
EA 329	Gaza
EA 330	Lachish (Tell ed-Dweir) ⁵⁹
EA 331	未分析
EA 332	Lachish (Tell ed-Dweir)
EA 333	未分析
EA 334	Zuḥra
EA 335	Gath (Tel Şafit)
EA 336	Zuḥra ⁶⁰
EA 337	Zuḥra ⁶⁰
EA 338	未分析
EA 362	Byblos (Jbail) - NGC
EA 363	Kumidi ³⁵
EA 364	Ashtartu (Tell 'Ashtara)
EA 365	Megiddo (Tell el-Mutesellim)
EA 366	Gath (Tel Şafit)
EA 371-372	未分析
EA 378	Gaza

⁵⁹粘土板の成分に目立った特徴がないため、ラキシュで書かれたと決定づける根拠はない。しかし、シェフェラ南部で書かれたことは確実であるため、Goren ら (2004: 288) ラキシュ周辺で書かれたと推定する。

⁶⁰EA 337 と EA 336 の差出人名はどちらも Ḥiziru で、EA 337 と EA 336 の粘土板の成分はほぼ同一である (Goren et al. 2004: 219)。したがって、これら 3 通の書簡はすべて Zuḥra 発信とみるのが順当である。EA 337 の粘土板の成分が EA 364 (Ashtartu 発信) と同一であるため、Zuḥra はバシヤン地域かその付近にあったと考えられるが (ibid.)、位置の特定はできない。

5 Belmonte Marín (2001) による位置情報

Izre'el (1990) は位置情報を示していない。Goren et al. (2004) にはカナン地域の遺跡の一覧があり、そこに位置情報も含まれるが、地域によって異なる座標を用いている⁶¹。そのため、本研究で一元的に位置情報を扱うには別の情報源が必要となる。表 2 に含まれるすべての地名の緯度と経度を知るには、Belmonte Marín (2001) が最適である。この書物は楔形文字文書地名目録シリーズの第 12/2 巻にあたり、紀元前 2 千年紀のシリアで書かれた文書に現れる地名（河川を含む）を網羅している。

Belmonte Marín (2001) から表 2 の地名の位置情報を抽出すると次のとおりとなる。ただし、表 2 で筆者が「？」を付けた項目については現時点での判断を保留し、今後の研究動向を見守りつつ最終的な結論を出していくことにする。

表 3：Belmonte Marín (2001) による位置情報

	緯度	経度
Ardata (Tell Arde)	34N25	35E55
Ashdod (Tel Ashdod)	31N40	34E35
Ashkelon (Tell Ashkelon)	31N40	34E30
Ashtartu (Tell 'Ashtara)	32N45	35E55
Beth-shean (Tell el-Huşn)	32N30	35E30
Beyrouth	35N54	35E28
Byblos (Jbail)	34N07	35E17
Damascus	33N30	36E20
East of Orontes		
Gath (Tel Şafit)	31N40	34E50
Gaza	31N50	34E55

⁶¹イスラエルの遺跡については Israel Grid System、レバノン沿岸部、アッカ平原、オロンテス川流域の遺跡については UTM (Universal Transverse Mercator) grid、ペカー渓谷の遺跡については Levant grid がそれぞれ用いられている。

Gezer	31N50	34E55
Hazor	33N01	35E34
Jerusalem	31N47	35E10 ⁶²
Kumidi	33N36	35E48
Lachish (Tell ed-Dweir)	31N30	34E50
Megiddo (Tell el-Mutesellim)	32N30	35E00
Mountains E. of Tripoli		
Nii (Qal'at al-Mudīq)	35N25	36E20
Nuḥašše		
Pella	32N25	35E35
Qatna (Tell el-Mishrife)	34N50	36E51
Qidshu (Tell Nebi Mend)	34N30	36E30
Shechem ⁶³	32N05	35E15
Sidon	33N34	35E21
Southern Bashan or Yamruk valley		
Şumur (Tell al-Kazel) ⁷	34N40	35E
Tell Jemmeh	31N20	34E25
Tell Keisan ⁶⁴	32N50	35E05
Tunip (Tell 'Asharneh)	35N17	36E24
Tyre	33N16	35E12
Ugarit	35N36	35E48
Zuhra	不明	不明

⁶²Belmonte Marin (2001) にはエルサレムの緯度経度が記されていない。これらは Parpola and Porter (2001) に記載された緯度と経度である。

⁶³EA253 は他の 2 枚と成分が異なる。シェケムでは複数のタイプの粘土が使われていたものと考えられる。

⁶⁴Akšap を Tall Harbağ (32N40, 35E01) とする説もある (Belmonte Marin 2001: 8)。テルの規模と層位から見ると Tell Keisan 説の方が有力であるが、粘土板の成分分析もこれを支持する結果となった (Goren, et al. 2004: 231-233)。

【参考文献】

- Albright, W. F. (1946) 'The Late Bronze town at modern Djett.' *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 104: 25-26.
- Belmonte Marín, Juan Antonio (2001) *Die Orts- und Gewässernamen der Texte aus Syrien im 2. Jt. v. Chr.* Répertoire géographique des textes cunéiformes; Bd. 12/2. Wiesbaden: L. Reichert.
- Goren, Yuval, Israel Finkelstein and Nadav Na'aman (2004) *Inscribed in clay: provenance study of the Amarna tablets and other ancient Near Eastern texts*. Tel Aviv: Emery and Claire Yass Publications in Archaeology.
- 池田潤 (1992) 「アマルナ語:紀元前 2 千年期のピジン」『オリエント』35(2): 1-21.
- 池田潤 (2006) 「GIS と言語研究」『一般言語学論叢』9: 1-10.
- Izre'el, Shlomo (1990) 'New translation of the Amarna letters.' Review Article of William L. Moran, *Les lettres d'el Amarna*. Correspondance diplomatique du pharaon. Traduction de W. L. Moran avec la collaboration de V. Haas et G. Wilhelm. = *Littératures anciennes du Proche-Orient*, 13. Paris: Les Éditions du Cerf, 1987. *Bibliotheca Orientalis* 47(5/6): 577-604.
- Knudtzon, J. A. (1915) *Die El-Amarna Tafeln*. Anmerkungen und Register bearbeitet von C. Weber und E. Ebeling. Vorderasiatische Bibliothek, 2. Leipzig. (Reprinted: Aalen, 1964)
- Moran, William L. (1992) *The Amarna Letters*. Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press.
- Na'aman, Nadav (1979) 'The origin and historical background of several Amarna letters.' *Ugarit-Forschungen* 11: 673-684.
- OEANE = Eric M. Meyers, et al. (eds.), *The Oxford encyclopedia of archaeology in the Near East*. New York: Oxford University Press, 1997.
- Parpola, Simo, and Michael Porter (2001) *The Helsinki atlas of the Near East in the Neo-Assyrian period*. Chebeague, ME: Casco Bay Assyriological Institute.

- Rainey, A. F. (1989-1990) 'A new translation of the Amarna letters: after 100 years.' Review of William L. Moran, *Les lettres d'el Amarna. Correspondance diplomatique du pharaon*. Traduction de W. L. Moran avec la collaboration de V. Haas et G. Wilhelm. = *Littératures anciennes du Proche-Orient*, 13. Paris: Les Éditions du Cerf, 1987. *Archiv für Orientforschung* 36/37: 56-75.
- Vita, Juan-Pablo (2000) 'Das Gezer-Corpus von El-Amarna: Umfang und Schreiber.' *Zeitschrift für Assyriologie und Vorderasiatische Archäologie* 90(1): 70-77

On the Provenances of Amarna Letters from Canaan

Jun IKEDA

This paper reviews preceding studies on the provenances of Amarna Letters from Canaan and tries to determine the spatial information of the linguistic corpus to be used in the linguistic-geographic project on Northwest Semitic languages in the second and first millennium B.C. supported by the Ministry of Education, Science, Sports and Culture, Grant-in-Aid for Scientific Research (18520292).

Doctoral Program in Literature and Linguistics

University of Tsukuba

1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8571, Japan

E-mail: ji@lingua.tsukuba.ac.jp